

アイロニー効果をもたらすメタファーについて —Robert Frost の “The Road Not Taken”

出口菜摘

序. メタファーと認識

メタファー (metaphor) は、文学作品や演説といった言語表現における修辞法のひとつと定義づけられるが、その射程は言語テキストの内部にとどまらない。メタファーは「超越」や「変化」を意味する “meta-” と「移動」を意味する “pherein” を語源に持ち、ある事柄・事物 A を、別の分野や次元 B へと移し替えることがその働きの本質である。つまり、メタファーが使用される時、必然的に転移や変容といったなんらかの物質変化が人間の認識上で起こる。認知言語学の第一人者 George Lakoff と Mark Johnson が *Metaphors We Live By* (1980) で、詳細に論じたように、メタファーは人間の認知に深く根ざしたレトリックである。それは人間の認知と相互作用的なダイナミズムのなかにあるがゆえ、以下のような働きを担うことが考えられる。人の感受性や思考への影響力の行使。喩えられる対象物への接近や理解の深度。言語化不可能なものの可視化など。これらの問題は個別的に論じられることが必要になるだろう。この多岐に渡るメタファーの働きについての一考察として、本稿は “dead metaphor” を取り上げる。特定のメタファーはあまりに多用されると、もはや修辞と意識されることなくその後も使用され続ける。文彩の役割は失われ「死んで」しまっているが、このメタファーは無意識下に体積する沈殿物のように、いつの間にか人間の慣習や物の見方に影響を及ぼすことになる。アメリカの国民的詩人ロバート・フロストの “The Road Not Taken” (1915)¹ はこの具体的な事例を提示してくれると思われる。本稿では、形骸化したメタファーがいかに読み手の判断を左右するかについて考察し、さらに死んだメタファーがアイロニー効果を生み出す際の重要な要素となることを論じる。

1. 「選ばなかった道」のひとつの解釈傾向

フロストの「選ばなかった道」には、森の中で二又に分かれる道を前に、その選択に悩む語り手の姿が描かれている。全体の構成を確認すると、1 連から 3 連では語り手が道を前に悩む場面、

4連では語り手が選択について語る未来の自分を想像する場面が描かれる。脚韻構成は abaab cdccd efeef ghggh のパターンをとる。

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both
And be one traveler, long I stood
And looked down one as far as I could
To where it bent in the undergrowth;

Then took the other, as just as fair,
And having perhaps the better claim,
Because it was grassy and wanted wear;
Though as for that the passing there
Had worn them really about the same,

And both that morning equally lay
In leaves no step had trodden black.
Oh, I kept the first for another day!
Yet knowing how way leads on to way,
I doubted if I should ever come back.

I shall be telling this with a sigh
Somewhere ages and ages hence:
Two roads diverged in a wood, and I—
I took the one less traveled by,
And that has made all the difference. (Frost, 1976, 105)

1連において“one”や“two”という数字、“two”と同義である“both”が多用される。さらに、自分の体はひとつであり、ひとつの道しか選べないことを悔やむ語り手の心情描写は、この詩のテーマが「道の選択」であることを前景化する。

二者択一に思い悩む状況は、日常的に耳にする話であり、読者にとっても想像しやすい。実際にこの詩は「人生の選択」の重要性を歌ったものと捉えられることが多く、例えば、選集『ロバート・フロスト詩集 - 愛と問い - 』の訳者である安藤千代子はこの詩に以下のような解説をつけている。

人生の岐路に立つ時、人足によってあまり踏み荒らされていない道を選ぶことは勇気も覚悟も求められるでしょう。人生は選択次第で変わりますが、もし、何年か後に、行かなかった道が気になるとしたらどうでしょうか。この詩の語り手は、こんな問いも投げかけているようです。フロスト自身も若い時に、人があまり選ばない詩人として人生を選ぶ一大決心をしています。この詩が書かれたのが40才の時で、まだ詩人として名をなしていなかった時でしたから、「幾年かの後、溜息ながらに、どこかでこれを語るだろう」という言葉には実感がこもっています。(安藤, 49)

安藤はこの詩の語り手に、詩人という「踏みならされていない道」を選んだフロストの姿を重ねている。この解釈を支えるのは、4連に見られる「踏みならされていない方の道を選んだ」という語り手の言葉と、「人生=旅」というロジックである。また、この見立てにおいては、「踏みならされていない道=困難さを伴うがゆえ、勇敢な選択」という意味付けが暗黙のうちに成立する。

同様の解釈は、Robert F. Fleissnerによる *Frost's Road Taken* (1996) にも見られる。このタイトルは「選ばなかった道」を意識してつけられたことは明らかであり、フライスナーは同書にてフロストの「ロマン主義的な個人主義」という詩作態度を、「選ばなかった道」と重ね合わせて論じている。

My purpose now is to show that Romantic individualism is presented in “The Road Not Taken” in its very windings (or subtleties of interpretation) . It reflects the poet’s own individualistic background, his innovative search for modern Romantic originality. Dissatisfied with academic life as too stultifying, he had selected what he felt was the bona-fide American path, namely that of the rugged individualist, even as did the persona in his poem, but then he also admitted to a certain hankering for the road way he had failed to take (or which he obviously could not take at the same time) . (Fleissner, 10)

フライスナーと安藤の解説との共通点は、両者が「人生=旅」というメタファーに基づいて議論していることである。確かに「選ばなかった道」に、このメタファーが使用されている。しかし、この詩の面白みは、この見立て自体にあるのではない。むしろ、このメタファーがいかに読み手の解釈を左右しているかに関心を向けるべきであり、そこが読みどころなのではないだろうか。つまり、強固に根付いたメタファーのために、「選ばなかった道」のテーマが不鮮明になっているということである。

2. 「人生＝旅」というメタファー

「選ばなかった道」が詩としての本領を発揮するのは、メタファーの内容ではなく、その機能が読み手の認識に働きかける時である。レイコフと Mark Turner は「人生＝旅」という発想に基づいた英語表現を列挙している。

When we think of life as purposeful, we think of it as having destinations and paths towards those destinations, which makes life a journey. We can speak of children as “getting off to a good start” in life and of the aged as being “at the end of the trail.” We describe people as “making their way in life.” People worry about whether they “are getting anywhere” with their lives, and about “giving their lives some direction.” People who “know where they’re going in life” are generally admired. (Lakoff and Turner, 3)

人生の到着点は旅の目的地と見なされ、そこへのプロセスは旅路に見立てられる。このような発想は英語圏に限定されるものではなく、例えば高村光太郎の「道程」(1920) に典型的に認められるように、日本語圏でも見られるものである。新倉俊一は『アメリカ詩入門』において、「道程」を引用し「選ばなかった道」のテーマを論じている。言うまでもなく、両者をつなぐのは「人生＝旅」というメタファーである。

彼[フロスト]の詩は人生的であり、教訓的なところが多い。ここにあげる詩もその代表的なものである。これは人生の岐れ路に立ったときの述懐の詩である。フロストは1912年2月10日付の手紙のなかで、ある夕方、寂しい十字路を歩いていたとき、自分とそっくりのひとが、もう一方の道を歩いてきて、まるで傾いた鏡のなかの自分の姿に出合ったような気がした、と述べている。道を人生行路にたとえる詩は多くあり、高村光太郎の「道程」でも、「僕の前に道はない／僕の後ろに道はある／ああ、自然よ／父よ／僕を一人立ちさせた広大な父よ／僕から目を離さないで守る事をせよ…／この道程のために」と歌っている(新倉, 26)

注目すべきは「道を人生行路にたとえる詩は多くある」という新倉の指摘である²。新倉が使う「人生行路」という四字熟語にも、「人生＝旅」という発想に基づいていることは言うまでもない。新倉は松尾芭蕉の句を引用して次のように続ける。

芭蕉が「この道や行く人もなき秋の暮」が俳道に徹する人間の孤独を歌っているように、フロストの詩も詩人という選ばれた少数者の道を行く者の心を述懐したものであろう。(新倉, 27)

このように人生を道に喩えるメタファー表現は古今東西において根強く、さらに注目に値するのは、そのために、詩の解釈が左右される点である。そのことを裏付けるように、メタファー蒐集家ともいえるレイコフとターナーも、「選ばなかった道」がこのメタファーを基に理解されうることを指摘している。

We typically read him[Frost] as discussing options for how to live life, and as claiming that he chose to do things differently than most other people do. This reading comes from our implicit knowledge of the structure of the LIFE IS A JOURNEY metaphor. Knowing the structure of this metaphor means knowing a number of correspondences between the two conceptual domains of life and journeys. (Lakoff and Turner, 4)

読者は作品を自分の知識や経験に引き寄せて理解しようとする。これらの先行する研究は、慣習化されたメタファーが、詩の内容を平易なものにする可能性を示している。文彩の輝きを失ったメタファーは、修辞と意識されず、このようにして人の物の見方に影響を及ぼしているのである。

3. 2本の道の分析

死んだメタファーは、言及対象に変化を生じさせることはない。その「分かりやすさ」のため、読者は自分の理解領域から出ることはなく、言及対象はその姿を変えない。「選ばなかった道」において、「人生＝旅」というメタファーの分かりやすさゆえに、詩のテーマだけではなくシグナルのように配置されている語彙や統語、詩の「語り方」が見落とされてしまう可能性がある。Elaine Barryは「選ばなかった道」に言及し、語り手の声に注意を払う必要性を強調している。

Without a proper attention to the speaking voice of Frost's poems, we may well get his subjects out of perspective. How many of us, for example, first read "The Road Not Taken" as a serious, if wistful, comment on the irrevocable decisions that govern our lives? Frost himself was fond of teasing his readers on their gullibility here ("I bet not one reader in ten know what 'The Road Not taken' is about"). He once declared that the most perceptive question anyone ever raised with regard to the poem was "Why the 'sight'?" (Barry, 12)

ここでの重要な指摘は、この詩が誤読を招く性質のものであること、そしてそれを避けるために語り手の声に注目すべきだということである。この詩のテーマは人生における道の選択の重要ではない。バリーが引用しているフロストの言葉（「10人のうちのひとりもこの詩が何についての

ものなのかわからないだろうよ) が示すように、フロストは「選ばなかった道」が誤って読まれることを十分に理解している。かつ、真のテーマは声のニュアンスを聞き分けなければ見つけられないことも、フロストが意図したことである。

以下の引用はフロストが自分自身の詩作法を説明したものだが、その手法は「選ばなかった道」にもあてはまる。

You get more credit for thinking if you restate formulae or cite cases that fall in easily under formulae, but all the fun is outside saying things that suggest formulae that won't formulate— that almost but don't quite formulate. I should like to be so subtle at this game as to seem to the casual person altogether obvious. The casual person would assume I meant nothing or else I came near enough meaning something he was familiar with to mean it for all practical purposes. Well, well. well. (Frost, 1963, 49) .

「公式」を用いながらも、明確には「公式化」できないものを提示するという方法は、「選ばなかった道」が、「人生=旅」という分かりやすいメタファーに支えられながらも、異なるテーマを有することを示している。

では、メタファーによって覆われた詩のテーマとは何なのか。この点を考えるため、2本の道の描写に目を向けたい。両者の比較は作品中に5箇所ある。2連では、“as just as fair”と“having perhaps the better claim,” “really about the same”の3箇所。3連では“equally lay”という表現。そして4連には“the one less traveled by”とある。

まず、2連の“as just as fair”という描写は、一見したところ、“as … as”の同等比較のように捉えられるが、最初の“as”は理由を示し、続く“just”は強調の働きをしている。そして、このフレーズの後には“as the other road”が省略されていると考えられる。語り手は「踏まれている道」を見極めようと両者の比較を行うが、2本の道は同じくらいに美しいのである。次の行では“having perhaps the better claim”と、一方の道がその優位さを主張し、語り手は受け身的立場で道を眺めている様子が描かれる。そして“really about the same”では、2本の道が同じようなものであることが再度語られる。3連でも、同等を意味する“equally lay”が見られる。このように2本の道には差異が見られず、語り手もその違いを見分けることはできない。それにも関わらず、4連で語り手は“the less traveled by”と人が通らない道を選んだと断言するのはなぜか。

4連におけるこの違和感は、道の描写だけに留まらない。4連では時間軸だけではなく、語り手の口調も変化する。語り手の意識は、助動詞“shall”が示すように、未来へと向かっている。しかし、“somewhere ages and ages hence”とあるように、未来といってもその地点は漠然としている。助動詞“will”ではなく“shall”が選択され、「確実に」というニュアンスが付与されるにもかかわらず「言う」状況は不明なのである。この奇妙さの原因は、語り手が「語ること」

へ「前のめり」であることによる。この語り手はともかく「言いたい」のではないだろうか。次のように考えると分かりやすい。一般的な会話というのは、なんらかの状況においてなされる。つまり、発言内容であるA（この詩の場合は、道の選択というトピック）が話題に上るためには、それに先立つような状況であるB、もしくはAを誘導するような先行する他者の発言Cが必要となる。しかし、「選ばなかった道」では、発言内容Aが必然とされるようなB、もしくはCとの因果関係は考慮されず、ただ「Aを言う」ということが強調されている。どのような場面かは不明だが、この語り手は「A」を言うことだけには確信を持っている。

4連において、「語り方」にフォーカスが当たるのは、語り手特有の「語る」ことへの関心のためである。バリーも言及しているが、なぜ“with a sigh”なのか。先ほど述べたように、発話されるシチュエーションが不明であるにも関わらず、ため息混じりの台詞を口にするのは、語り手が「どのように言うか」に意識を向けているからである。他にも演技がかった言い回しが目につく。決め台詞である19行目“I took the one less traveled by, /And that has made all the difference”の直前では、“and I -/ I took”とダッシュが使用される。基本的にダッシュは、物事の言い換えなり補足のために用いられるが、発話行為においては、ひと呼吸を置くことで、後に続く言葉へ聞き手の関心を集めるといった機能をもつ。つまり、明らかにここでも語り方が問題になっている。

このようにテキストの細部に目を向けると、この詩は人生における選択の重要性をテーマにしているのではないことが見えてくる。むしろ、一般的に人は選ばなかった道に想いを残すということが、ユーモラスに描かれていることが見えてくる。

4. アイロニーの構造

フロストは「人生＝旅」という定番のメタファーを、詩のメッセージとして使用したのではなく、むしろ、このメタファーの凡庸さを利用して詩を成立させている。伝記的側面から言えば、この語り手のモデルは、交流を持っていたイギリスの詩人Edward Thomasであり、選択しなかったものに執着するという彼の癖が詩に反映されている。このような側面から作品を考察することもできるが、ここではテキストの修辞に議論を限定したい³。というのも「選ばなかった道」にみられるメタファーは、アイロニーを生み出す重要な要素であるからだ。

「人生＝道」のメタファーに引きずられることなく、語り手の声に注意を払う先行研究はすでにある。興味深いことは、それら先行研究が「選ばなかった道」を論じる際、“irony”や“ironical”という表現を用いる点である。例えば、“‘The Road Not Taken,’ far from being merely a failure of ironic intent, may be seen as a touchstone for the complexities of analyzing Frost’s ironic voices” (kearns, 73 下線は引用者)はその典型であり、以下に同様の指摘を引用する。

If we take Frost to be the speaker, however, we are likely to ignore the irony in the poem and see it as a sentimental justification of following one's personal bent, of being an individual. We may well focus on the last two lines almost to the exclusion of the rest: The speaker has chosen an individual, uncommon way of life. But this reading leaves us with some troublesome questions about internal consistency: Why does the speaker insist in stanzas 2 and 3 that the roads are really pretty equally worn? And why does he sigh, since that might imply regret over the choice? These questions can lead us perceive the irony if we pursue them (though many readers fail to do so) . (Potter, 52 下線は引用者)

J. L. Potterはこの詩の基底をなすのはアイロニー（反語）であると見なしている。さらに、Jay Pariniはアイロニーの性質をフロストに結び付け、「選ばなかった道」を説明する。

What, then, can we make of the final stanza? My guess is that Frost, the wily ironist, is saying like this: "When I am old, like all old men, I shall make a myth of my life. I shall pretend, as we all do, that I took the less traveled road. But I shall be lying." (Parini, 945 下線は引用者)

これらの指摘は、語り手の声に注意を払うことでアイロニーの要素を抽出しており、そのプロセスについて異議はない。しかし、本稿が強調するのは「選ばなかった道」において形骸化したメタファーがアイロニーの効果を上げるために重要な役割を担っていることである。

アイロニーとは、一般的に、表面の意味と反対の意味を述べる修辞法である。ローマの修辞学者であるクインティリアヌスはアイロニーを以下のように説明する。

[語句と意味内容とで]正反対のことが示される種類の諷諭には、反語があります。(人々はこれを *inclusio* と呼んでいます)。これは発声によってか、[話者の]人柄によってか、事柄の性質によってかで察知されます。すなわち、これらのどれかが語句にそぐわなければ、弁論の意図が反対であることは明らかです。(クインティリアヌス, 302)

アイロニーが成立するためには、発話内容と真意が異なることを示す信号が必要となる。話者の言い方もアイロニーを見分ける合図のひとつであり、そのシグナルを梃にして表記されている意味が反転される。「選ばなかった道」では2本の道の描写だけではなく、4連に見られた過剰な言い回しがシグナルにあたると思われる。つまり、「私は踏みならされていないほうの道を選んだ。それが決定的な違いを生んだ」という発話内容は、字義の意味と反対の含意を持つのである。

では「人生＝道」のメタファーは、どのようにアイロニーの効果に貢献しているのか。アイロニーは、意味内容の反転によって生じるが、その対象は発話内容に限らずに、より広く受け入れ

られた概念をも含めることができる。つまり、結論を先に述べるなら、「選ばなかった道」は死んだメタファーという、一般的に受け入れられた現実認識を揺り動かすことで、アイロニーの効果を上げているのである。

この点を補足するには、言語学者である Dan Sperber と Deirdre Wilson の議論 “Irony and the Use — Mention Distinction” (1981) が助けとなる。スパーバーとウィルソンは、アイロニーが成立するためには、先行する発話や話者が共有する認識への反響である「エコー」が不可欠であると指摘している。

It seems more accurate to say that all examples of irony are interpreted as echoic mentions, but that there are echoic mentions of many different degrees and types. Some are immediate echoes, and others delayed: some have their source in actual utterances, others in thoughts or opinions; some have a real source, others an imagined one; some are traceable back to a particular individual, whereas others have a vaguer origin. When the echoic character of the utterance is not immediately obvious, it is nevertheless suggested. (Dan Sperber and Deirdre Wilson, 309-310)

ここで示されているように、エコーの対象は先行発話だけでなく、思考や通念、さらには即座にエコーと分らないものまで含まれる。この引用において、形骸化したメタファーについての言及はないが、「人生＝道」というメタファーが諺や格言と同様に広く共有されていることを踏まえると、ここに入れることができよう。「選ばなかった道」では、字義的内容による反語へと読者を誘導するだけでなく、テキストを超えて、メタ的に読者の見方を指し示して、それをずらす装置としてメタファーが機能しているのである。

以上、フロストの「選ばなかった道」を巡る解釈から出発し、死んだメタファーが読み手の理解を左右すること、また、この詩がメタファーの働きを逆手に取ったものであることを論じた。本稿は、メタファーの働きの一側面を考察することを試みたものであるが、精彩を失ったメタファーがアイロニーの効果を上げる要素のひとつとなることを明らかにした。

Notes

1. 「選ばなかった道」は1915年に *Atlantic Monthly* 誌の8月号に掲載され、のちに *Mountain Interval* (1916) に収録されている。執筆時期は、1912年から1915年の英国滞在中、おそらく1914年頃だと考えられている。
2. 新倉が言及している手紙とは、Susan Hayes Ward に宛てたものである (1912年2月10日付)。本稿の議論はテキストの修辞から「選ばなかった道」を考察する方法を取るため、この手紙を本文中では取り上げないが、内容は以下のとおり。

Two lonely cross-roads that themselves cross each other I have walked several times this winter without meeting or overtaking so much as a single person on foot or on runners. The practically unbroken condition of both for several days after a snow or a blow proves that neither is much travelled. (Frost, 1965, 45)

この書簡と同詩と結びつけた研究として Pritchard (67) や Reuben A. Brower などがある。以下は Brower から。

Although 'The Road Not Taken' lends itself like some of Shakespeare's sonnets to over-easy identifications with the youthful self of the poet or the reader, it is still a powerful image of the choice of life. The power comes in part from the strange experience when Frost almost met his 'own image' in the woods near dusk, at a place where 'two lonely cross-roads' intersected each other. (Brower 231)

3. Barry (12-13) や Potter (52) が挙げられる。

Works Cited and Consulted

- Barry, Elaine. *Robert Frost*. New York: Frederic Ungar, 1973. Print.
- Brower, R. A. *The Poetry of Robert Frost: Constellations of Intention*. New York: Oxford University Press, 1963. Print.
- Frost, Robert. ---. *The Letters of Robert Frost to Louis Untermeyer*. New York: Holt Rinehart and Winston, 1963. Print.
- . *Selected Letters of Robert Frost*. Ed. Lawrance Thompson. London: Jonathan Cape, 1965. Print.
- . *The Poetry of Robert Frost*. London: Jonathan Cape, 1976. Print.
- Fleissner, R. F. *Frost's Road Taken*. New York: Peter Lang, 1996. Print.
- Kearn, Katherine. *Robert Frost and a Poetic Appetite*. Cambridge: Cambridge UP, 1994. Print.
- Lakoff, G. and Mark Turner, *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor* U of Chicago Press (大堀俊夫訳『詩と認知』 紀伊国屋書店、1994年)
- Lakoff, G and Mark Johnson, *Metaphors We Live By*. Chicago: U of Chicago Press, 1981. Print. (渡部昇一ほか訳『メタファーと人生』大修館、1886年)
- . and Mark Turner, *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: U of Chicago, 1989. (大堀俊夫訳『詩と認知』 紀伊国屋、1994年)
- Parini, Jay. "Robert Frost." *Columbia Literary History of the United States*. Ed. Emory Elliott. New York: Columbia UP, 1988. 937-946. Print.
- Potter, J. L. *Robert Frost Handbook*, University Park: Pennsylvania State UP, 1980. Print.
- Pritchard, W. H. *Frost: A Literary Life Reconsidered*. New York: Oxford U P, 1984. Print.
- Sperber, D. and D. Wilson. "Irony and the Use - Mention Distinction." Ed. Peter Cole. *Radical*

Pragmatics. New York: Academic P.1981. 295-318. Print.

Walcott, Derek. "The Road Taken." *Homage To Robert Frost*. New York: Farrar Straus Giroux, 1996, 89-117. Print.

新倉俊一『アメリカ詩入門』、研究社、1993。

安藤千代子訳・解説『ロバート・フロスト詩集—愛と問い—』、近代文藝社、1992。

瀬戸賢一『認識のレトリック』海鳴社、1997。

クインティリアヌス『弁論家の教育 3』森谷宇一ほか訳、京都大学学術出版、2013。

(2014年10月1日受理)

(でぐち なつみ 文学部欧米言語文化学科准教授)